

原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号
第八十七号

原告団レポート

遺族——
野口秋峰 君

明日に希望

野口秋峰君。名まえを「あきほ」と呼ぶ。

と十八歳(昭和三十三年九月十四日生れ)。三池の遺族の一人で、三池大災害裁判原告団でもっとも若い原告である。

秋峰君は、県立大川工業高校の三年生。福岡県下の草刈地帯——三池郡城島町江上本、千七百三十七番地の一の一宅から、毎日自転車通学している。所要時間三十分。雨の日も風の日も、彼はまったく変ることなく学校をぬきしつてペダルを踏む。

成績は優秀。きたる三月には、晴れて卒業の日を迎える。

就職希望先は、建設業関係。将来建築士の資格を取って、バリバリ仕事をすること、生涯の希望をかけている。

「まず二級建築士の資格を取るのに、学校卒業後四年間の実技の積み重ねが必要だ」

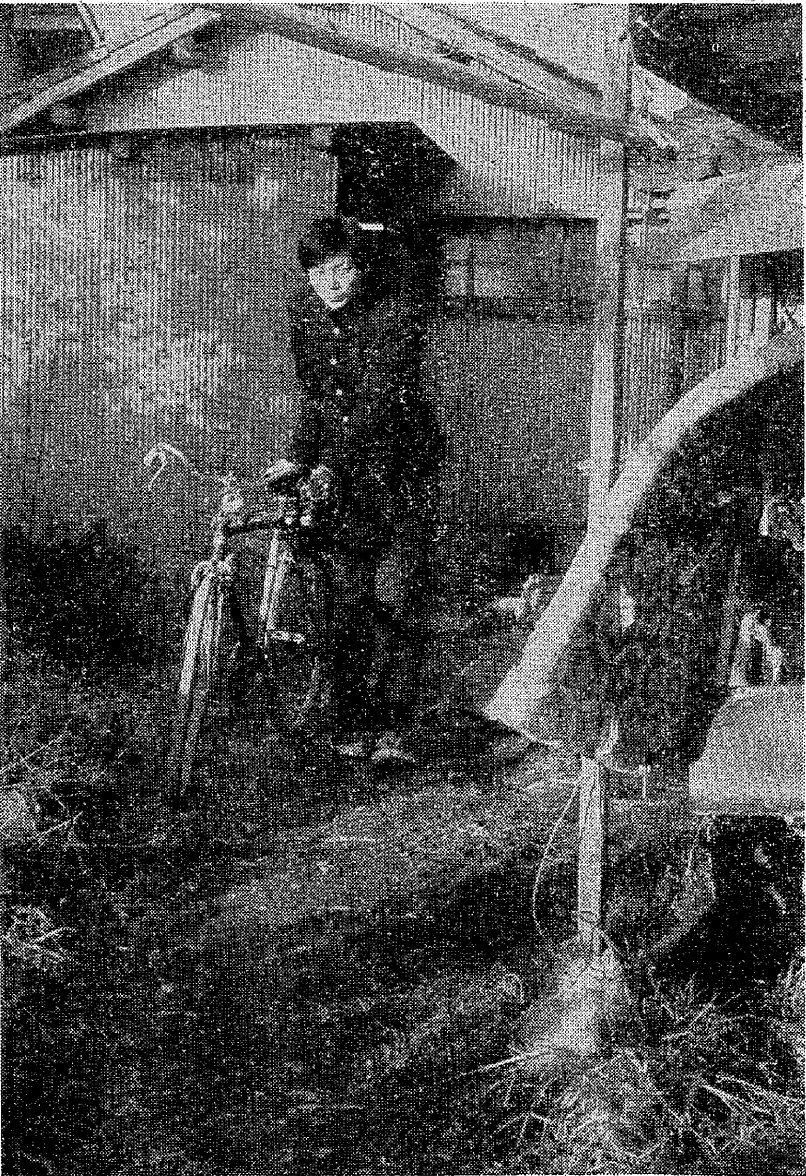
静かな口調で語る秋峰君に、「二級建築士もねらっているんだろ」と聞くと、「それからまた三年間も実技を積み重ねないと、それを

庭には雑草

秋峰君はとがわすか十八歳。しかも工業高校に通う身ながら、実はひとり暮らしだ。父をあの三池大災害でうしなつたあと、二人で生きてきた母親のカズエさんが、昭和五十年九月九日突然死んでしまったからである。

秋峰君はとがわすか十八歳。しかも工業高校に通う身ながら、実はひとり暮らしだ。父をあの三池大災害でうしなつたあと、二人で生きてきた母親のカズエさんが、昭和五十年九月九日突然死んでしまったからである。

秋峰君の家は、なるほど草刈のどまんなかであつた。「あきほさんがいませんから……」という通り、玄関に通ずる庭



秋峰君は、今日も自転車で高校へスタート。

輝きに満ちた明日を

「身うちの暖い手にささえられ、一人で歩く……」

三池で、もつとも若い原告

て学校にもいっていません」

カズエさんが、息子に残しておいてくれた貯金の方は別として、身うちの暖い手の援助を語るうえでまず忘れられないのが、隣り合

わせた住んでいる永松さん一家のささである。

主人の勇さん(四十歳)は、その妻カズエさん(同じく)とともに中学校の教師。勇は、二人(小学四年生と三年生)の子ども

がある。

ほかでもなくこの家は、秋峰君の伯母に当る先だつた。いまは世にない母親カズエさんの実姉で、名前をツタエさんといふ。

かあさんに起きてもらわなければ……。秋峰君は、いつもならんで寝ている母親のからだに手をや

一人きりに

カズエさんの死は、秋峰君にとつてあまりにも非情だつた。行年五十七歳だつたというが、何の手

告することもない突然の死だつた。

その朝、秋峰君は寝床のなかで目を覚ました。六時半ごろだつた

と彼はおぼえている。

いつものならもうその時刻には、自分を学校にだすためにちゃんと起きて、炊事場で立ち働いてい

るはずの母親カズエさんだつた。

ところがどうしたことか、その日

に秋峰君は文字通り、一人きりとなつたのである。

秋峰君は、いとも簡単に、

あつて人に頼み、医師を呼ん

だものの、もはや硬直さへはじま

つていたカズエさんの体はどうす

ることもできなかった。心不

重なる不幸

そんな秋峰君にとって、さういふことが二つあつた。一つは死んでいった母親が、彼のために

思ひがけなくもかなりの貯金を残して置いてくれたこと。

二つは、まわりの身うちの暖い

とから常に暖い援助の手が差し伸べられていたこと、である。

秋峰君は、

「かあさんが残してくれたお金

が、私が工業高校を卒業するまで

は十分あります。それに、月づき

奨学金がもらえますし、授業料や

PTA会費が免除されます。

そして身うちの暖い手、安心し

なよくしてくれまうから、安心し

なよくしてくれまうから、安心し

あの大災害で命を奪われたとき、五十二歳だつたことになる。

三川鉦入社は、昭和五十五年三月四日、常一労働務の開始仕組工

だつた。

秋峰君は、父親について思いだすことはほとんどない。まだ五歳のときのことだから無理もない

が、隣の永松勇さんに聞けば酒もたしなまず、金魚や鯉の飼育、庭や盆栽づくりにとまもつたの趣

味として楽しんでいたというから、きっと正直な人柄だつたに違いない。

それだけに、まだ人の心なかつた秋峰君はともかく、妻のカズエさんにとっては、夫の死がもたらした痛手は大きかつた。

秋峰君は、誇りにあつた——「ちゃんと裁判所に、正式の届け出を出しています」

三度三度の食事は同家で。「いっそのことここに移動して、いっしょに暮らさないか」と、勇さん

が、それだけはとわつたといふ。「やっぱり、かあさんと毎晩

ならんで寝てきた家から離れたくない。それに、この家でい

るから、秋峰君の言葉には、ついつい涙をこらえることができな

かつた。

「二人では、朝起きるのにこま

輝く明日を

いまは自分の側から消えた母親になり変り、三池大災害裁判闘争を進める原告の一人として歩きはじめた野口秋峰君。

つい一年ちょっと前までは、な

らなから取れた二つのフロンに

寝ていたのに、相手の母親がいな

くなつてしまったいまは、たつた

一つ敷いたフロンにもぐりこまな

ければならない秋峰君。「やっぱりさびしいのは……」と聞けば

彼は答えていった。

「一夜中、まわりがシーンとな

つてしまったなかに、たつた一人

ぼつんとおられるもんですから、

やっぱりかあさんのことが思ひだされてしまいます。とくに何のひ

とも聞かないまま死なれてしま

でも、亡天から託された息子秋峰君を、一人まの人間にまで育て

てあげなければならぬ責任を負

っていることを思えば、いつまで

も泣いていることは許されなかつ

た。

カズエさんは現住所へ移り住む

と、近くの菓子づくりの店に働き

にでかけるようになった。せんべ

いをつくる仕事で、帰りは毎日夕

方の六時をきまつて過ぎていた

といふ。

きっと無理をしたのだらう、そ

のうちカズエさんは胃潰瘍をわず

らひ、久留米大学付属病院に入

院、大手術。

ひとまず健康を回復して家に帰

ると、こんな家はにがらやれ

るゴザの耳かがりの仕事を手にい

れ、がんばつた。

その中で、どこそこいきたい

といふばかりすつていって

れる母親もあつた。秋峰君の話

「あるとき、かあさんは箱崎八

幡宮と大宰府天満宮につれてい

てくれました。そして帰りに、太

宰府名物の梅ヶ枝餅を買って帰

たことをいまもおぼえています」

野口秋峰君の明日に輝きあれ。

母の思い出

秋峰君の父親の名は巖さん。大正元年十二月二十三日生れたから